

生きづらさと、自己表現によるそこからの解放

～アートや映像による～

京都造形芸術大学 藤澤 三佳

1 目的

本報告の目的は、主に家族の問題に苦しみ、さまざまな生きづらさを抱えながら、絵画やセルフ・ドキュメンタリー(自己を描いたドキュメンタリー)によって自己表現をおこなう人を取りあげて、どのように、生きづらさから解放されるのかを、インタビュー調査や書物のことばから考察することである。生きづらさの体験のなかで、「言葉にならないことを表現」するということはどのような行為であるかを示す。

2 方法

絵を通じた自己表現に関しては、家族の問題に苦しみ、自らの摂食障害を描くKさんへのインタビューや書物のことばを取りあげ、また、自らを表現するセルフ・ドキュメンタリー映像に関しては、その影響力が高い映画監督河瀬直美の書物のなかのことばを通じて、同様に作家、社会活動家の雨宮処凛に関する自叙伝のなかのことばを通じて考察する。例えば雨宮は、自らのいじめや家族問題等の苦しい体験について赤裸々に書き、「ぼんやりとした生」しか感じられなくなり、自殺未遂をおこすほどの「生きづらさ」を感じていたが、そこから生の充実感を得ていく転機を取りあげていく。また、同様の観点から、他にもセルフ・ドキュメンタリーで自己表現する人々をインタビュー調査から示す。

3 結果

本報告では、絵や映像表現を、悩んでいる生きづらさの感情を象徴化していく行為として焦点をあてて、絵を描くなかで、今までと異なった自己イメージが作品のなかに現れてきたように、同様に、映像のなかでも表現するなかで新しい自己があらわれてきて、ひとたびそれが完成されると、「生きている感覚」を取り戻していくという結果を示した。本報告では、生きづらさを「表現」することの意味を考察し、例えば河瀬のセルフ・ドキュメンタリーであれば、カメラを介在させ、またフィルムとして完成させることや他者の鑑賞によって、空虚である自己と社会はつながっていくことを示した。河瀬同様に、雨宮も、作品に対する他者からの共感により、その表現は、「世界への窓口」となり、「自己と世界を掴みに行く」ことになる。そして、社会とつながり、反貧困ネットワークやプレカリアートの社会運動に携わり社会的活動家になっていった。

4 結論

生きづらさから派生する「心身の症状」を、「負」として扱い、治療して消去することのみを目的としても、その「負」を意識させる視線は、ますます当事者に、自己スティグマ化現象を生じさせ、そのことを恥ずかしいこととする思いから抜け出せなくするという逆の結果をもたらしてしまうことも生じる。

本報告でみてきた生きづらさのアートによる表現は、社会によって縛られた自己によって、現実の社会規範のなかでは息も絶え絶えになっている「自由」の息を吹きかえらせる。人間にとっての「自由」の意味を考えると、人間とアートによる表現に関する意味を考えることは非常に重要であると考えられる。

参考文献：日本証券奨学財団調査研究助成報告書(2011)『障害者と芸術・文化の社会学的研究』藤澤三佳